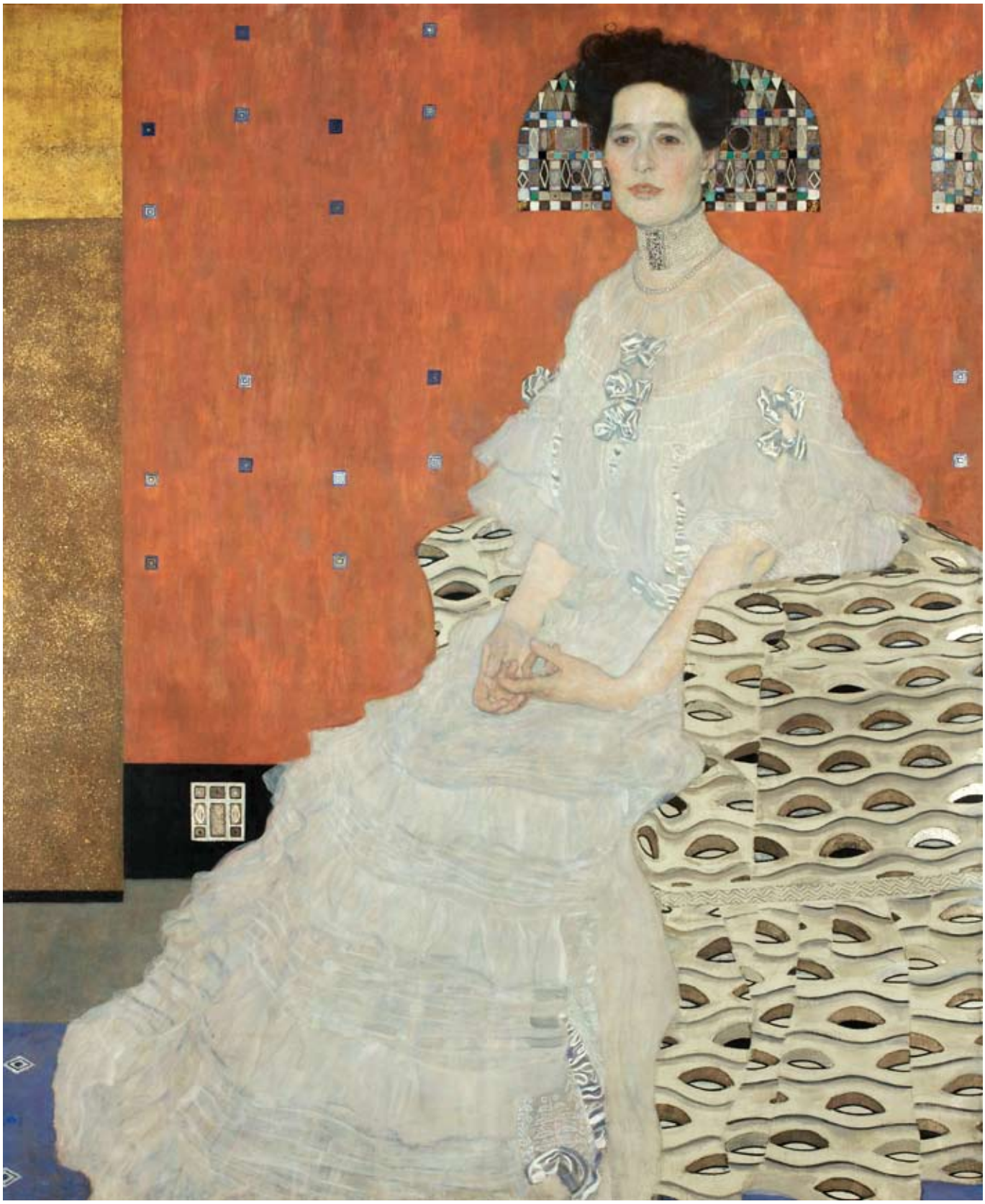
月刊ウィーン GEKKAN-WIEN

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年　創刊 28 年目
創刊 1989 年　Nr. 319
2016年1月号



Gustav Klimt　Fritza Riedler　1906　Öl auf Leinwand　153 x 133 cm　© Belvedere, Wien
ベルヴェデーレ下宮 Unteres Belvedere　企画展「クリムト / シーレ / ココシュカ と女性たち」にて 2016 年 2 月 28 日まで展示　10 頁参照

杉本純の原子力の話 II

ウィーンと京都 52

我が国産官学の協力により、二〇一三年十二月からベトナム原子力界のリーダを担う人材、及び研究や設計ができる自立した研究者・技術者の育成を目的とした日本ベトナム原子力研究・人材育成フォーラムを開催している。二〇一五年十一月二六～二七日に第五回フォーラムがハノイで開催された。過去四回のテーマは、それぞれ熱流動、材料、研究炉、人材育成だった。今回は機器・構造物の非破壊検査に関する最新の技術と研究の動向について情報や意見交換を行うことにより、両国のコミュニケーションの活発化を図ることが目的である。我が国からは、日立、東芝、三菱、関電、国際原子力開発、原子力安全システム研究所、原子力機構、東工大、長岡技科大、東大、京大から計三三名、ベトナムからは原子力研究所、材料科学研究所、ハノイ工科大学、ハノイ電力大学などから約六十名の参加があった。

フォーラムでは計二三件の発表とパネル討論があった。発表では我が国産業界がこの分野で豊富な経験や知見を有していることが示された。「若手研修者の研究における課題とその対応」と題するパネル討論では、筆者はベトナム原子力研究所のズン氏と共同議長を務めた。日本の五名の学生、ベトナムの三名の若手研究者と学生二名、計九名のパネリストから、研究で遭遇した課題とその克服方法について報告を受け、研究を進める上で重要と考える事項などについてパネリストの意見を聞くなど、フロアを交えて討論を行った。最後に筆者より、研究では各研究者の独自性、学術や応用価値などが重要であること、また、両国の若手の交流が今後の協力にとって必須であることなどをパネル討論の結論としてとりまとめた。前回に引き続き一泊二機中泊と弾丸出張であったが、交流の深まりを感じさせるフォーラムだったと思う。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市に関係する小説家・医者であるアルトゥル・シュニッツラーと森鴎外について述べてみたい。シュニッツラーは、ウィーン大学医学部を卒業して医師として働きつつ、作家活動を早くから開始した。フランス文学の影響下にあった「若きウィーン」の一員として、憂愁・繊細美を特徴とするウィーン世紀末文化の雰囲気を基調に、鋭い心理分析と、洗練された印象主義的技法によって死と恋愛を描写した。新ロマン主義の中でも最も有能な人物の一人とされている。「アナトール」、「輪舞」、「みれん」などが代表作である。「みれん」では肺を病む女と看護する男との間の恐ろしい死としみじみとした愛とを交錯させている。

一方、森鴎外は現在の島根県に生まれ、東大医学部を卒業して陸軍軍医になり、一八八四年から陸軍省派遣留学生としてドイツで四年過ごした。一八八七年には万国衛生会に参加するためウィーンに十一日間滞在している。代表作の二つ「高瀬舟」は、江戸時代の京都の高瀬川を下る高瀬舟を舞台とし、安楽死をテーマとした有名な短編歴史小説である。鴎外はアンデルセンの「即興詩人」、ゲーテの「ファウスト」などの翻訳もしているが、シュニッツラーの「みれん」と「恋愛三昧」を翻訳している。両人とも奇しくも一八六二年に生まれ、ウィーンないし京都に関係し、医者として務めつつ、医者の目から見た死や恋愛を描いた小説家であることが共通している。

余談であるが、筆者は鴎外の小説は「高瀬舟」を含めて若い頃に何作か読んだが、シュニッツラーの「みれん」をやっと最近読んだ。両市に関連する両人を紹介できた幸運に感謝しつつ、編集部に撮影をお願いしたシュニッツラー旧宅の記念碑の写真を掲載させていただく。

■ 杉本純 京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長 ■